

広西省貴県における団練の形成と郷紳

吉 野 香

はじめに

太平天国前夜の広西省では、拜上帝会の活動のみならず、多くの天地会系秘密結社の活動が活発化し、不穏な空気が立ちこめていた。嘉慶年間（一七九六～一八二〇）頃から以降、特に道光年間（一八二一～五〇）半ばをすぎると、郷里の重大な問題として、こうした治安の悪化に対処する手だてが講じられるようになる。すなわち保甲・郷約の結成や、各村で砦を築く、あるいは団練を結成して直接「匪賊」との対決に備える、などといった動きである。

こうした動きの担い手となり、その中心として活躍した者の多くは、その地域社会において、指導的役割を担う者であった。いわゆる郷紳層である。従来の太平天国研究、あるいは天地会研究において、彼らの多くは自らの階級的利益に固執し、反乱に対して仮借なき弾圧を加えた反動者として非難を浴びせられてきた。だが近年菊池秀明氏などによって、彼らを中心として成立した社会そのものを客観的に分析し、その内部に生じた矛盾を検討する試みが進められつつある。

本稿は太平天国前夜の広西省貴県において、団練の形成に郷紳層がいかなる役割をはたしたのか、初歩的な検討を加えるものである。こ

こで取り上げる貴県は、太平天国の翼王石達開の故郷として、また土客械闘に破れた「来人」の多くが拜上帝会に吸収されるという事件があった県として、太平天国史のなかでは極めて重要な位置を占める。ただ上述のような、旧来の観点から貴県を扱った論考は多々あるようであるが、貴県そのものの地域社会の成り立ちを追求した論考は少なく、管見の限りでは、菊池秀明氏の「太平天国前夜の広西における移住と民族―貴県の場合」を挙げることができるのみである。また貴県の郷紳層のなかで中心的な役割を果たしたのは、広東省出身の商人、林氏であったが、十九世紀前半の広西省全体を考察するなかで、この林氏を初めて紹介されたのは、西川喜久子氏であった^①。これらの論考もふまえながら、論を進めたい。

一 郷紳層の諸関係

先述したように、貴県における移住の特徴と、定着後の相互関係を、実地調査で得た史料をもとに分析されたのは菊池秀明氏である。

氏は貴県における諸民族を、①チワン族②漢族の〳土白話〳（広東語系の土語を話す人々）③漢族の〳客籍〳エリート④客家、の四種に分類されている。彼らの中で、太平天国前夜に貴県においてイニシアテ

イブを握ったのは、客籍 エリートたちであったという。清代以降に貴県へ移住してきた彼らは、原籍地との密接な関係を利用して社会的上昇を果たしていった。またそれまでに県内の指導者であった土白話有力宗族との婚姻を結ぶことで支配層に食い込んでいった。そして太平天国前夜には科挙合格者を輩出し、政治的、経済的に圧倒的な優位に立ち、他の集団は、政治的発言権を獲得ないしは維持することができず、「客籍 エリートの支配の下で、残されたパイ」を巡って競争した」という。かつて優勢を誇った土白話宗族も、政治的発言力の低下を免れなかった。^⑧

今回の論考では、氏が客籍 エリートとして紹介された林氏と、彼らが結んだ社会関係について、見ていきたいと思います。林氏については、地方志等の他に、民国十九年（一九三〇）重修の『林光遠堂族譜』が残されており、これらによってその系譜を明らかにすることが出来る。^④

林氏の略歴を簡単に述べておこう。^⑤ 林氏の移住は、康熙五十四年（一七一五）に林志経が、商売を営むために広東省番禺県から貴県県城を訪れたのが始まりであった。彼は、広東と往来して茶葉などの商品を扱い、また県城から北山里の龍山墟へ生活用品を販売する事業などを行っていた。当初は蓄財して帰郷する予定であり、広東にも邸宅を購入するなどしていたが、やがて子女の婚姻により、県城東側の墟心街に寄居するようになったという。移住当初の経営は芳しくなかったが、三代目林大楨が乾隆十九年（一七五四）、米の広東への搬出で大成功し、経営は波に乗る。当時広西は広東の米穀供給地として注目されていた。その後も米穀の販運を中心とした経営を続け、経済的成功をおさめた林氏は、宗祠建設の計画を推進し、嘉慶三年（一七九

八）に竣工する。また、ほぼ同時に族譜の編纂作業も行われ、嘉慶十一年（一八〇六）に完成している。また一方では科名の獲得に励み、嘉慶十五年（一八一〇）には一族初の挙人が誕生する。以後道光年間には一名の進士と五名の挙人を輩出、貴県屈指の一族となった。

林氏の成長の過程と、婚姻関係を中心とした社会関係の推移は『林光遠堂族譜』からうかがうことができる。ただしこの族譜は、婚姻の相手側に関しては必ずしも詳細な情報が載せられていない。大半が相手の姓のみで、その一族の情報が載っていることは稀である。こうした難点はあるものの、それらをまとめてみると、ある程度の動向は推測することができる。^⑥

林氏の各世代別の婚姻の時期は、生年から推測するに第二世代は康熙年間末～雍正年間初期、第三世代は乾隆十年から三十年頃、第四世代は乾隆三十年代から嘉慶年間初期、第五世代は乾隆年間末期から道光二十年代、第六世代は嘉慶年間末期から同治年間あたりではないかと思われる。今回はこの中でも道光年間あたりまでを対象とした。また第七世代にも、一部道光年間に成人、結婚している族人がみとめられ、これも抽出し、検討した。^⑦

紙幅の都合上詳細な説明は避け、結論から述べるならば、林氏の経済的・社会的地位の上昇にともない、婚姻相手も経済的・社会的地位のより高い者が選択されるようになった。具体的には、当時貴県の文化的先進地域であった郭南里の郷紳層との婚姻がこれにあたる。^⑧ 一方、科挙合格によって政治的・社会的地位を確立した嘉慶年間から道光年間末には、県城の代表的宗族のほぼすべてとひとおり婚姻関係が結ばれているようである。この嘉慶年間以降に林氏を取り結んだ婚

姻関係について少し細かく見てみよう。

婚姻の相手で姓名ともに明らかなのは少ないが、そうした中で注目すべきものを挙げれば、まず四代林申達（中達）の娘が、城廂西街の陳錫鈞に嫁いでいる。城廂西街陳氏は、乾隆九年（一七四四）に福建省永春州から移住してきた一族である。二代の天相・三代の佐極はいずれも塾の講師をして生計を立て、後学の育成につとめた。錫鈞は、この佐極の長男で、嘉慶十八年（一八一三）に挙人となっている。陳氏初の試験及第者であった。道光八年（一八二八）には佐極の三男済鈞が挙人となっている。四男禹鈞も道光二十九年（一八四九）の副貢である。

また佐極は道光二年（一八二二）に孝廉方正に挙げられている。このように陳氏自身が優秀な人物を輩出したのみならず、錫鈞などは県城の紫泉書院で主講をつとめ、後進を育成し、その中からは科名を獲る者が踵を接したというから、陳氏が貴県の知識人全体に与えた影響の大きさも想像にかたくない。またのちに錫鈞の娘は林廷俞に嫁いでいる。^⑧

五代林之秀の娘は、城廂十三巷の梁廉夫に嫁ぐ。梁廉夫は、道光二十六年（一八四六）の副貢である。梁氏が選挙表に名を現すのは、廉夫の兄之棟が、道光十二年（一八三二）に挙人となってからである。廉夫は、その列伝に「博学端にして品行誼なること一邑に冠たり。生徒に教授し、門に名を知らるるの士多し」とあるように、その品行の正しさ、学識の高さで知られたようである。また、先述の陳氏の族人六鈞の娘が、梁之棟の次男のもとに嫁いでおり、林氏―陳氏―梁氏間の関係の強さがうかがわれる。^⑨

六代林廷章の娘は、城廂三界祠の馮会のもとに嫁いだ。彼の祖先馮

龍泉は明の成化年間（一四六四―一八七）の挙人で、両広総督韓雍に従って浙江省から移住、彼の記室を勤めたという。また馮氏は清代広西で広く信仰された三界廟に祀られた人物、馮克利の末裔を称した。彼は明代、王陽明のヤオ族反乱制圧に協力し功績のあった人物であるが、後仙衣を得て羽化し、仙人となったという。馮克利が羽化した後、その仙衣を子孫が代々受け継ぎ、県城に三界祠を設けて祀事を行った。このように貴県での長い歴史を持ち、知名度も恐らく高かったであろう馮氏であるが、試験の成績に関して言えば、清代の選挙表に情報は殆どみられない。この他県志で確認しうるのは、馮会の父馮済濤の代からで、その族兄弟と思われる馮済輝の名も見える。彼らは生員資格も持たなかったようだが、済輝は林芝齡（林氏とは別の一族。道光二十四年進士）の妹と婚姻関係を結んでいる。馮会の婚姻と合わせて考えると、馮氏が、強力な宗族と婚姻関係を取り結ぶことによって、より発展しようとする意志をもっていたことが見て取れる。^⑩ 林氏は、かつて自らの成長の過程で、郭南里の紳士達が演じた役割を、自らが果たすほどに至っていたといえよう。また馮会の代では、彼も含めて生員となる者が複数現れており、学問に励んで社会的上昇をはかり、一方で師弟関係を通じて有力な紳士との関係を強化していた。馮会は林芝齡の門人であったという。^⑪

次に、六代林廷宣は、道光十七年（一八三七）副貢李棣榜の娘を娶っている。李棣榜の一族に関する情報は、各『貴県志』を整理したが詳細は不明である。後述するように李氏との婚姻は多数見られるが、果たして李棣榜と同族か否かは判断がつかない。

この他、殆どの情報が姓のみ明示しているのだが、数世代にわたっ

て林氏と婚姻を結んだと考えられる一族に、南江黄氏がある。南江とは、城廂南岸に位置する村で、黄姓が多く居住する村であった。清代には書塾の経営が有名だったという^⑨。この南江黄氏と思われる黄慶疇は、林逢春の娘を娶っている。黄慶疇について、県志には情報がないが、あるいは道光二十三年（一八四三）の華人黄慶蕃の族兄弟の可能性もある。

こうした婚姻関係の検討からは、林氏を中心に陳氏・馮氏・李氏・黄氏との間に親密な関係が結ばれていたことが分かる。

これらの宗族のほか、一方で城廂の「富戸」として林・羅・翁・李・朱の五家があったという^⑩。翁氏・朱氏は選挙表に姓氏が見えないが、おそらくは商人層であり、林氏とは商業活動において連帯を結んでいたと思われる。朱姓に関しては、すでに第三世代に婚姻が行われており、翁・羅・李姓に関しては、第四世代からである^⑪。前述したように、『林光遠堂族譜』の婚姻に関する情報は粗漏であり、同姓であってもそれが果たして上述の「富戸」の成員なのかは確証がない。ただ嘉慶年間の林大楸とその夫人盧氏の七十一歳の祝賀では、その準備に携わった者として城廂の黄輔清（嘉慶十九年進士）・先述の陳錫鈞・郭南三里の譚応泰（嘉慶六年拔貢）らとともに羅上錦の名前が挙がっている。羅上錦は例貢生で、儉約に勤めて家を成し、慈善事業を行い、橋梁の修築などに投資を惜しまなかったという^⑫。彼を「富戸」の一員と見なすのは問題ないようである。彼の妻は林氏であったといい、ここに林氏と「富戸」羅氏の関係が推測される。羅氏との間に緊密な関係が存在していたとすれば、族譜に見える翁氏・朱氏・李氏も「富戸」の一員であった可能性が高い。

以上、嘉慶以後の林氏を中心として取り結ばれた婚姻関係を通覧して気付くのは、婚姻の相手となった宗族が、知識人の家や商人層をも包括して、かなりの広範囲にわたっていることである。貴県における地歩を固めた後の林氏は、一方で有力な宗族と婚姻を結びつつ、成長を望む下位の集団との婚姻も受け入れている^⑬。したがってここで整理した婚姻関係とそれから明らかとなる宗族間の結びつきは、貴県の郷紳層を構成する主だった面々をほぼ網羅していると見てよからう。ではこうした貴県の指導層は団練の形成・運営にいかなる役割を果たしたのか、団練の担い手がこれらの宗族とどう関わっているか、章を改めて検討しよう。

二 太平天国前夜の団練

前章では貴県における郷紳層の諸関係を検討したが、これが果たして、道光年間以降貴県で結成された団練とどのような関連性があるか、見ていきたい。

貴県における団練設立に際しての背景は、各『貴県志』や、梁廉夫『潜斎見聞隨筆』に詳しい^⑭。道光年間半ば、「盜賊」の起こりは、「広東の游匪」がやってきて、城中の舗戸や墟市に潜伏し、往々にして「土来の小醜」と結んで劫略を行うようになったことであった^⑮。

一方清朝統治者側にも腐敗が進行する。道光年間に知県を三度にわたって歴任した楊曾恵は、「京客を随えて招搖として市を過ぎり……（中略）……歴年の倉穀を盜売し、以て私債を償う」という横領行為を繰り返した^⑯。日々税を無理矢理督促し、一方では犯罪者を野放しにした。これから「賊の忌憚すること無」くなり、「匪風に熾ん」と

表 貴県団練局の設置とその団総

年 代	人 物	備 考
道光27年	湯聘三	諸生。
道光30年	林逢春	道光5年挙人。林氏の族人。
	羅慶章	元名は羅沅。增生。「富戸」羅姓の族人か。
	梁廉夫	道光26年副貢。『潜斎見聞隨筆』の著者。
	朱聯傑	職員。「富戸」朱姓の族人か。
	李榮芳	林氏と姻戚関係？
	翁際泰	「富戸」翁姓の族人か。
咸豊3年	李棣榜	道光17年副貢。
	朱聯傑	先の人物に同じ。
	林良仿	廩生。
	鄧秉賢	生員。
	陳熙	情報無し。
咸豊6年	林逢春	先の人物に同じ。
	陳字衍(?)	情報無し。
同治2年	馮会	庠生。三界廟の馮克利の末裔。
	周作新	情報無し。
	羅銘勲	情報無し。「富戸」羅姓の族人か。
	林冠芳	生員。林氏の族人。
	龔寅	情報無し。
	梁廉夫	馮会の死後、此れに代わる。
同治4年	林廷選	道光25年進士。林逢春の息子。
	梁廉夫	先の人物に同じ。
	李恩祥	廩生。「富戸」李姓の族人か。

なったという。また、楊曾恵の前任と思われる、署県令として赴任した王済は、県北の瀧頭・六班諸山の銀鉞を開削しようとし、「来人」を召集したが、「五方より雜り至り、良歹分かたれず、其の掘りて利を得る者は来去常無く、本を欠く者は日は則ち賭場を開設し、夜は則ち潜出して賊と為る。焼香排会し、種種不法あり。」という状況になった。『潜斎見聞隨筆』は、「もし優秀な知県がいれば、早日に驅逐

し、さらには賊風を止むこともできたであろうに」と王済を非難している。また辺防の担当者も、道光半ば以降は業務を怠り、担当地に赴任もせずに、城廂で賭博を行うなど、墮落していたという^⑧。梁廉夫は、天地会の活動が活発化し、社会不安に至った原因の大なるものとして、こうした統治者側の問題を重視している。かくして貴県では、道光二十年代には「既に盜賊横行す」という状

況に陥っており、団練の結成をはかるのも時間の問題であった。

貴県県城で団練が結成されたのは、道光二十七年（一八四七）以降のことで、計六回にわたった。その団総、つまり団練の長をまとめたのが前頁の表である。

以下では、これら六回の団練結成の経緯について、それぞれ追ってみよう。

道光二十七年、県城に団練局が設置された。この時、多くの人は事を畏れて管理することを願わなかったが、湯聘三が「因りて富戸に奔走し、求めて団総と為」ったという。この団練は、間もなく廃弛した。みずから求めて団総となったにも関わらず、湯聘三は、やがて「悪匪」と結びつき、米穀の出境を禁じた時も、密かに船を出して利を得たという。また、咸豊四年（一八五四）に馮二が城を陥落させた際には、彼らに協力している。

湯聘三と林氏との関わりは、明らかでない。しかし、林氏と同じく米穀の流通に関わっていた可能性はあり、関係が全くなかったとは言えない。同族か否かは判定できないものの、林氏と湯姓との間に婚姻関係が結ばれている例もある。結局湯聘三は「逆衿」と見なされ、復城後に捕らえられ、処刑されている。後世に編纂された史料の中では、湯氏との関わりが意図的に隠されている可能性もありうる。

道光三十年の団練は、知県張汝瀛の命により林逢春・羅慶章・梁廉夫・朱聯傑・李榮芳・翁際泰の六名が団総に任ぜられ、墟心街に団練局が開設された。当時朝廷は広西の紳士商民の団練を結成し軍に協力することを奨励し、また、既に優れた効果を上げた団練の規定については、各州県に通知して模範とさせている。貴県での団練結成の動き

も、おそらくこれと無関係ではなかったであろう。林逢春は道光五年（一八二五）の挙人である。羅慶章は、選舉表に名は出ていないが、彼の族兄弟と思われる羅濤・羅浚はいずれも道光年間の人である。

羅濤・羅浚の父は、前章で紹介した羅上錦で、つまりは林氏とも関わりを持つ人物である。梁廉夫は前章で検討したとおりである。朱聯傑・翁際泰はその出自が明らかでないが、これも前章で確認した「富戸」の朱氏・翁氏なのではないかと推測される。李榮芳は、その族兄弟と推測される人物が林翰清（光緒三年進士）の外祖父にあたり、道光年間には既に林氏と親戚関係にあったと考えられる。

さて、林氏を中心に主だった郷紳層が参加したこの団練は、官紳協力しあい、その成果も十分発揮されたようだ。紙幅の都合上割愛するが、『潜斎見聞隨筆』にはその様子が生き生きと描かれている。

咸豊三年（一八五三）の団練局の設置は、知県李嘉年の指示によるものである。『潜斎見聞隨筆』によると、この頃、李嘉年と紳士達の間には不和が生じていたという。具体的な事情は明示されていないが、これにより、李嘉年は、別に李棣榜・朱聯傑・林良仿・鄧秉賢・陳熙などを団総に任命している。新たに団総とされた人物のうち、前章で少し触れた李棣榜、道光三十年の団総にも任ぜられた朱聯傑以外の三者については、その詳細は不明である。

ところで、李棣榜のその後の行動は興味深い。咸豊四年（一八五四）八月、天地会の馮二らが県城を襲い、知県李嘉年に県印の引き渡しを求め、貴県を占領するという事件が起こった。五山巡檢劉裕琨は彼らに付き、自ら洪天堂と号した。この時黄慶著と李棣榜が、団練局を設立して、官に、黄金義・王興福ら二十余名の賊首を勇目と為

し、各街の守備につかせるように請うたというのである。^⑨ 黄慶蕃は、前章の南江黄氏の項で若干触れた人物である。のち大成国占領下の懷城（貴県から改名）県令となり、同治三年（一八六四）に捕らえられ処刑された。^⑩ 後述する咸豊六年（一八五六）の団練によって、県城は復歸するが、その後、李棣榜らは捕らえられ審判に附されている。^⑪ またこの記事には、黄慶蕃と李棣榜の二人以外に、黄鼎鎮・黄鼎鏞の名前も挙がっている。彼らは前章で述べた黄輔清の息子達であり、彼らもまた林氏と関係を持っていた。ここに至って、郷紳層の間にも天地会に対する態度をめぐって思惑の違いが生じてきていたことが見て取れる。この事に対し、林氏はいかなる反応を示したか定かではないが、少なくとも李棣榜の名は林氏の族譜にも刻まれており、県志にも名前が見えている。黄鼎鎮に至っては咸豊十一年（一八六一）に挙人となっており、鼎鏞もまた名を残している。恐らくその後の処置は軽いものだったのであろう。名を削られたのは、のちに大成国に附いた黄慶蕃のみであったようだ。^⑫

先述したように、咸豊六年に団練が結成されているが、この時には、別に林逢春・陳字衍（？）等が団総となったと民国『貴県志』にある。^⑬ しかし、その経緯は不明である。林逢春は、先の道光三十年の団総でもあった人物であるが、陳字衍については詳細は分からない。この時、林逢春は、林廷宣や陳璠らと県城の回復を議し、兵を南寧の左江鎮総兵色克精阿に請い、知県李嘉年と県城を回復している。^⑭ 林廷宣は、前章で紹介したとおり林氏の族人であり、陳璠は城廂西街陳氏の族人で、陳済鈞（道光八年挙人）の次男である。陳氏と林氏の関係は、前章で確認したとおり、婚姻関係で結ばれていた。

咸豊六年の貴県県城の回復はわずか数ヶ月で終わり、同年九月には大成国の占領下に置かれた。^⑮ 咸豊十一年（一八六一）六月には太平天国の翼王石達開が県城に翼王府を設置、大成国の陳開らと連絡を取りあった。しかし程なくして广西按察使蔣益澧が潯州城を奪回し、陳開は捕らえられ、処刑された。一方石達開も貴県を離れ、一部の大成国の余党を吸収して广西を離れることを余儀なくされた。八月には黄全義が城を以て降服したが、黄鼎鳳を中心とした大成国の余党は各地に散在し、清軍に抵抗を続けた。^⑯ 同治二年（一八六三）の団練は、このような時期に广西布政使劉坤一によって委任された。前章で検討した馮会・梁廉夫以外の四名のうち、周作新と羅銘勳は、残念ながら詳細が不明であるが、羅銘勳は「富戸」羅姓の可能性もある。林冠芳は、『林光遠堂族譜』に名前が見え、林氏の族人である。

同治四年（一八六五）の団総の任命は、黄鼎鳳討伐後のその余党対策という意味合いがあった。任命は广西巡撫張凱嵩による。林廷選は林氏の族人で、道光二十四年（一八四四）の挙人である。梁廉夫はこれで三回団総を経験したことになる。李恩祥については、詳細はわからないが、或いは「富戸」李姓なのかもしれない。

以上、各団総についてまとめてみた。湯聘三の例は推測でしか林氏との関連が見出せなかったが、他の例については、その多くが林氏の族人か、あるいは林氏と関わりの深い人々であることが明らかとなった。このことは何を示すか。

咸豊初期、广西右江道として广西に赴任し、団練の総理も行った嚴正基の言葉は、このことを考える上で参考となろう。彼は、「論粵西賊情兵事始末」の中で、当時の団練局の局務にあたる人物について、

次のような期待を寄せている。

太約公正廉幹なる者を得て専ら局務を司らしむれば、結団集賢の事を講求するに於いては必ず周く、出力請奨の人を臚挙するに於いては必ず允る。事を議れば衆従うを樂しみ、一人を賞すれば衆勸むるを知る。之を省の内外局紳中に求むれば、殊に人に乏しからず。

（嚴正基「論粵西賊情兵事始末」咸豐四年正月）^①

おおよそ公正廉幹な者に、団練の局務を司らせたなら、団練の結成や資金集めのことを講ずれば必ず十分に行うことができ、尽力して賞与すべき人を並べ挙げるにおいては必ず公平である。事を議れば部下は喜んで従い、一人を賞すれば勤め励むを知る。

つまり、当時の団練局を司る紳士、即ち局紳に求められたのは、資金を提供する商人や紳士から、団練の構成員の末端までをとりまとめる指導力と、公正な行動によって彼らから得られる信用であったといえる。従って、団練を任命するにあたっては、少なくとも理念的には、当地で最も指導力に優れた者を選び、かつ局紳相互間にも不安材料が生じないように考慮されたはずである。

すでに第一章で見たように、林氏は貴県において有力宗族ばかりか下位の宗族や商人層とも婚姻関係を結び、在地秩序の中心的位置に存在していた。団練に任ぜられた者の多くが林氏一族かその関係者であったことは、林氏のネットワークが団練組織の基礎にあることを意味し、それは国家にとっても林氏を取り巻く在地の人々にとっても都合なことであった。団練の任命者である巡撫や布政使・知県が貴県の実情を把握し、当地の社会秩序を踏まえた上で団練局を組織したこと

は間違いない。嚴正基の期待する団練局のありようは、貴県においては、当地の名望家林氏を中心とする社会関係を基に実現したのだとひとまずは言えるのではないか。

ただ、李棟榜の項で見たように、天地会に対する態度は局紳間で異なっており、強固な社会関係とは裏腹な状況もみてとれる。この状況はどのように見ていけば良いのだろうか。今はまだ答える術がない。

今後の課題としたい。

む す び

今回は、地方志や族譜に見える宗族の成員の婚姻関係を中心に検討し、さらにその関係が後の団練の構成にも反映していたことを確認した。しかし、本来ならばこの作業は、郷紳層の関係のみならず、地方権力との関係、庶民との関係、当時の貴県の実況など全体の検討なしには行えない作業である。また、今回は県城の団練のみを取り上げたが、彼らと郷村の団練との関係も、見逃せない。今後はこの点を視野に入れながら再検討したい。

史料的にもほとんど地方志と族譜しか扱わなかったが、この時期の史料としては檔案や、広西に派遣された清朝官僚の著作などもある。特に清朝官僚の著作は、団練との関わりを知る上で重要な史料となる。

註

- ① 菊池秀明「太平天国前後の広西における移住と民族―貴県の場合」『中国民族史への視座―新シノロジー・歴史篇』（東方書店、一九九八年）。
- ② 西川喜久子「広西社会と農民の存在形態―十九世紀前半における―」

- 『講座中国近現代史』第一巻（東京大学出版会、一九七八年）。
- ③ 前掲註①論文。『客籍』とは、氏によれば「土人」即ちチワン族及び彼らと同化した漢族下層移民と対立する概念で、広西入植後も移民出身であることを自覚かつ主張し、……（中略）……地域社会で優位な立場を築いた人々に対する総称であった」という。（菊池秀明『広西移民社会と太平天国』（本文編）風響社、一九九八年、四三―四四頁）。貴県に関しては若干分類が異なるが、客籍に関する解釈には特に言及されていないので、同様とみてよいと思われる。但し、今回の論考では、史料制約での分類を行うことは難しく、用いることは出来ない。参考にとどめるのみである。
- ④ ヌタ系図協会所蔵マイクロフィルムによる。
- ⑤ 林氏の移住及び商業活動については、西川喜久子氏の前掲註②論文に詳しい。『林光遠堂族譜』。
- ⑥ 以上は各族人の子供の生年などから推測した。貴県における結婚年齢について、清代は不明だが民国は十六歳から二十歳の間だったという。（広西省政府編輯『民国二十二年 度 広西各県概況』第一冊、一九三四年。「貴県」五二頁。京都女子大学図書館蔵マイクロフィルム『中国近代政治史地資料』所収。）なお、林氏と他の宗族との婚姻に関する情報は特に断らない限り『林光遠堂族譜』による。
- ⑦ 前掲註①論文。
- ⑧ 『陳氏族譜』国立国会図書館蔵。光緒十四年（一八八八）重修。民国『貴県志』巻九、選舉。巻十六、人物、列伝。
- ⑨ 民国『貴県志』巻九、選舉。巻十六、人物、列伝。『陳氏族譜』。
- ⑩ 民国『貴県志』巻二、社会、宗教、附三界孫仙。巻十三、古蹟、祠廟。巻十六、人物、列伝。民国『貴県志』選舉表に挙がっている馮姓は、いずれも住所が異なったり不明であったりで、同定できない。
- ⑪ 民国『貴県志』巻十六、人物、列伝。同上「清鄭猷甫林芝齡墓誌銘」。
- ⑫ 「清代、以科挙取士。延師課子、設帳授徒、遍於閭里。……（中略）……：県属書塾、南江黄氏三台書屋、桐嶺龔氏浮青書屋為最著。」（民国『貴県志』巻八、教育上、義学書塾。光緒『貴県志』巻之一、輿図、城廂図。梁廉夫『潜齋見聞隨筆』「盜賊始末」（註⑬の参照のこと）。また饒任坤・
- 陳仁華編『太平天国在広西調査資料全編』（広西人民出版社、一九八九年）二六頁によると、清末の貴県で富を誇った「貴県の四大家」は、林・羅・翁・李の四姓であったといい、ほぼ重なっている。
- ⑭ その後、朱姓・羅姓は第七・八世代に、翁姓は第六・八世代に、婚姻関係を結んでいる。道光年間前後にあたる。李姓に至っては第三世代以外の殆どで婚姻を結んでいる。
- ⑮ 「恭祝」（『林光遠堂族譜』一四頁）。黄輔清は『客籍』エリートの一人（前掲註①論文）。民国『貴県志』巻十六、人物、耆寿表上。
- ⑯ 林氏の結んだ社会関係を、前掲註①論文の四つのサブ・グループに即して可能な限り分類すれば、『客籍』エリートには陳錫鈞一族・黄輔清一族が、土白話、宗族には馮会一族・李榮芳一族（後述。註⑲参照のこと）があてはまる。
- ⑰ 『潜齋見聞隨筆』は、貴県城廂の紳士梁廉夫の著書。序文と、光緒『貴県志』への引用から、一八六四年以降一八九四年までの間に書かれたと思われる。筆者が参照したのは『近代史資料』第一期、一九五五年に収められているもので、全文のうち道光二十八年から同治六年の動乱に関わる文章のみを抜粋、さらに叙述の重複したもの、「封建主義を宣伝する、史料価値の全くない」もの、本人の議論、文中の飾り文句などは等しく取り去っているとのこと。
- ⑱ 以下に本文で使用する史料は特に断りのない限り『潜齋見聞隨筆』の「盜賊始末」による。
- ⑲ 「随来京客招搖過市。……（中略）……曾患盜寇歷年倉穀、以償私債。」（民国『貴県志』巻十七、前事）京客とは、高利貸しの類か。「京客者、蓋資金牟利之流也。」（民国『貴県志』巻十七、前事）。
- ⑳ 民国『貴県志』巻十七、前事。
- ㉑ 「自道光中年、木梓督補分府已不赴任、祇令家人坐墟收規、五山守備亦常駐郡城、所有巡檢並守汛之官、均在県城開賭。」（『潜齋見聞隨筆』「盜賊始末」）。
- ㉒ 『潜齋見聞隨筆』、民国『貴県志』をもとに作成。なお、林良仿について、民国『貴県志』では「林良防」につくる。
- ㉓ 『潜齋見聞隨筆』「官紳衙役為盜」。

②4 民国『貴県志』巻四、兵防、団防。

②5 『潜齋見聞隨筆』「官紳衙役為盜」。

②6 民国『貴県志』巻十七、前事。

②7 「尤須地方紳士商民、協力同心、庶衆志成城、剿辦更可得力。著徐広緒等、出示剴切曉諭、激以大義、並遴選賢員、広為勸導。如紳士商民中、有能自為訓練、並出資協助、有裨軍需者、既可自衛身家、即宜量為甄叙、事竣著該督撫查明、奏請優加獎勵、以為好義急公者勸。」（『清文宗実録』道光三十年九月丙申条）。

「至広西横州博白兩処団練章程、前已有旨、令徐広緒分飭兩省仿照妥辦。茲擬奏稱、業經通飭各州縣因地制宜、並刊刻學政許乃釗所輯鄉守団練之法通行辦理。著即飭令各屬實力奉行、毋致有名無実。將此由四百里諭令知之。」（『清文宗実録』道光三十年十月庚辰条）など。陸宝千『論晚清兩広の天地会政權』（中央研究院近代史研究所、一九七五年）二三五頁。

②8 羅濤（雲章と改名）は道光五年挙人。羅浚（漢章と改名）は道光八年挙人。（民国『貴県志』巻九、選舉、選舉表三）。羅上錦は漢章により文林郎の称号を得ている。（光緒『貴県志』巻之四、紀人、封廕）。

②9 光緒『貴県志』巻之四、紀人、封廕。前掲註①論文によるとこの李氏は、土白話、宗族であり、客籍、エリートのもとで政治的影響力の維持をはかったという。

③0 『潜齋見聞隨筆』「盜賊始末」。民国『貴県志』巻十七、前事。なお、「盜賊始末」には、黄慶蕃の名前しか挙がっていない。また、『平桂紀畧』巻一では、県城は四月に趙洪・覃七によっておとされたとしている。今は県志等に従う。

③1 民国『貴県志』巻十六、人物、列伝。大成国は、咸豐五年（一八五五）に、広東の天地会首領陳開・李文茂等が潯州府を中心として建設した政權である。前掲註②論文では、同年九月に彼らが貴県を掠し、黄全義・黄鼎鳳等が之に附いたとある。これは『平桂紀畧』巻二の同年八月の記事を九月と訂正したもののだが（一〇頁）、『清文宗実録』では「上年八月間、広西艇匪竄踞貴県城池。」とあり（咸豐六年八月癸卯条）、訂正の根拠は明かでない。また、同論文は民国『貴県志』巻十七、前事の咸豐六年の記事「九月十二日、陳開・李文茂・梁培友拠県城。黄全義・黄鼎鳳附之。」を、

五年の誤りとして先の『平桂紀畧』の記事と同じ事件を扱ったものとみているが、県志の記事は県城回復後のものであり、同様と見なせるか疑問である。むしろ（咸豐六年）九月、貴県復陥。（『平桂紀畧』巻二）に対応したものと見るのが自然であろう。『潜齋見聞隨筆』「盜賊始末」も、県志と同様の立場をとっている。今回は、咸豐六年の記事は六年のこととして扱う。

③2 「論内閣。勞崇光奏請將失察属員通匪之署知県議処、並將牽控各紳革審等語。……（中略）……至各紳民呈内牽控該県紳士候選教諭李棣榜・候選県丞黄鼎鎮・舉人黄慶蕃・貢生黄鼎鏐・均着一併斥革、帰案審辦。」（『清文宗実録』咸豐六年九月丁卯条）。

③3 「旧志以反清除名。」（民国『貴県志』巻十六、人物、列伝）。

③4 民国『貴県志』巻四、兵防、団防及び巻末の刊誤表による。林逢春が団総となったのは明らかであるが、陳字衍に関しては刊誤表の訂正が曖昧であるため、推測にとどまる。

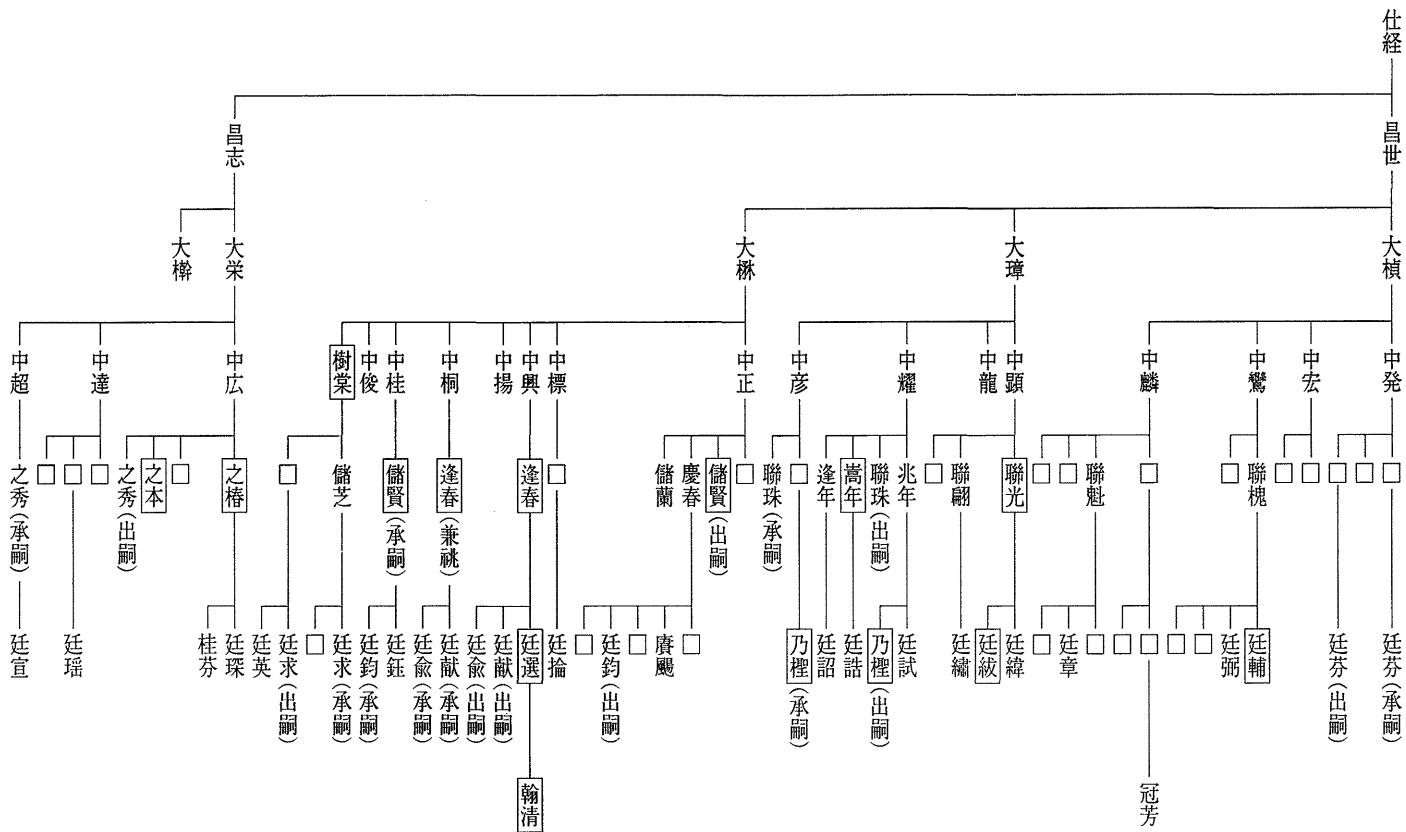
③5 光緒『貴県志』巻之六、紀事、寇畧。民国『貴県志』巻四、兵防、団防。巻十七、前事。県城の回復は『清文宗実録』では二月とあるが（咸豐六年八月癸卯条）、民国『貴県志』や『潜齋見聞隨筆』では五月とあり、『平桂紀畧』では七月とある。

③6 註③を参照のこと。

③7 梁任葆「石達開回師広西的闘争及其和大成国的關係」（『歴史研究』一九五七・一九）。民国『貴県志』巻十七、前事。『潜齋見聞隨筆』「盜賊始末」。

③8 「太約得公正廉幹者專司局務、於講求結団集賢之事必周、於臚舉出力請獎之人必允、議事而衆樂從、賞一人而衆知勸。求之省内外局紳中、殊不乏人。」（『皇朝経世文統編』巻九十四、兵政二十、勦匪二）。

仕経 — 昌世 — 大楨 — 中発 — □
 図 林氏系図（『林光遠堂族譜』をもとに作成）



※第5世代以降の族人については、本文に関わる人物・任官者・生員以上の者のみ抽出した。なお第7世代については本文に関わる者のみである。

□で囲った人物は進士・挙人及び歳貢以上の貢生。
(民国『貴県志』巻9、選挙、選挙表)